

【研究課題】

熱中症死亡に関わる気象条件の要因解析

研究期間：2016年2月1日～2020年3月31日

2013年、2018年の熱中症死亡者の解析からは熱中症死亡の多くは高齢者であり、1週間程度の高温期に集中発生する傾向が認められた。屋内外の別では大部分が屋内発生であった。両年ともに高温期の開始と熱中症被害の増加には時間的なずれが認められ、連日の高温下での暑熱負荷の蓄積による被害増幅効果が示唆された。2013年の死亡者の地区別解析では内陸部で死亡率が高い傾向が認められ、夏の日中の気温分布における内陸域の高温傾向と一致するものと思われた。経年的な解析では2018年の熱中症被害は従来的高温年と比べて救急搬送数は多く、死亡者数は少な目であり、熱中症に対する社会の意識が高まり早めの対応（積極的な救急対応）が行われるようになって死亡の抑制がある程度図られたことが推測された。